

環境問題と生き方・行き方



工学博士 石川 晴 雄
電気通信大学 情報理工学研究科
知能機械工学専攻 教授

昨年（2009年）の12月に気候変動枠組条約締約国会議（COP15）がデンマークで開催されましたが、その開催を通して、日本を始め、世界の多くの人々が地球温暖化に対する危機感をあらためて共有したのではないかと思います。気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の第4次報告によれば、過去150年間での世界平均気温の上昇は約1℃、世界平均海面上昇は約20 cmなどとなっています。これらの現象は、気候変動を伴いつつ、人類の生存に強く結びついている水環境、生態、食料、健康などへ具体的影響をもたらすと、指摘しています。いったん上昇した気温を下げるには、さらに長期の時間が必要であることもいわれています。また別の機関からは、現在の産業に関連した地球資源の有限性についてもいくつかのデータが報告されています。採掘の技術や経済性などの観点での報告もあります。

一方で、環境汚染による食物連鎖により引き起こされた人類史上最初の病気であり、「公害の原点」といわれる水俣病など、いくつかの公害が、日本の場合1950年代から70年代にかけて、当時の高度経済成長に暗い影を投げかけていました。

他方で、1972年にはローマクラブから資源の枯渇と環境悪化に関するレポート「成長の限界」が出されるなど、世界の良識ある人々、機関や国連などから、様々な警鐘が発せられてきました。また同時にそれらの克服のための多くの努力も継続されてきています。最近よく聞く「持続的発展」という理念も1980年に国連等の世界機関から出されています。

大学の教育の場で「設計工学」に関する授業を行って

いますが、いわば、ものづくりに関する技術的内容を扱っています。学期末近くの授業では、先に述べたような資源と環境の問題とものづくりの関係についても講義します。いわば技術の発展がもたらした環境問題を技術がいかに克服するか、がテーマですが、学生の反応は、技術的内容もさることながら、そうした資源制約と環境問題の重大さに関して、特に工学系の自分たちが社会の第一線に出て行ったときに直面する課題であることに、ある種の緊張感を感じているようです。

さまざまな団体、個人の環境問題に関する取り組みを支援するある財団の活動に関与しています。そこでは毎年、活動報告会があります。植樹、水質浄化、ごみ処理、里山保存、野生動物保護など多種多様な報告がありますが、ひとしく感じることは、活動をされている方々は自身の生き方として活動を推進されているということです。実に熱心に、生き生きとして報告されます。社会貢献のなかに自身の生き方を見出した喜びと充実感を表現されています。

環境問題への取り組みは、「持続的発展」の理念にもあるとおり、経済的発展との両立や後に続く幾世代もの人々の生存に関わる重要な難しい課題です。しかしこの課題は国連におけるCOPの会議から始まって、個人や家庭が行う家庭ごみの分別など、国連、政府、企業、教育機関、団体、家庭、個人など、様々なレベルでそれなりの取り組みが可能な課題です。誰しものが、どの組織もが参加できるこうした課題は少ないのではないのでしょうか。社会の構成組織としてもそうですが、学生、技術者、主婦、経営者、公務員、教育者、研究者、政治家など個

人のそれぞれの役割ごとにも、取り組める課題でしょう。最近、次のような新聞記事を見ました。ノーベル平和賞受賞者、ワンガリ・マータイ博士が日本で講演した折、学生から「環境問題に関心があるが、学生として何をしたらよいか」との質問がありました。博士は「今はしっかりと沢山勉強すること。それが後にすべて役立つでしょう。そして何かひとつ、環境問題に取り組むこと」

という返事でした。

資源の有限性、環境問題の重大性や後に続く世代への責任に思いを馳せると、一人ひとりが、また一つひとつの組織がその生き方、行き方として、何かに取り組むことが求められているように思います。また問われているように思います。そうした生き方と行き方の蓄積によって社会は変わっていくのではないのでしょうか。

